

和書

内閣文庫	
番號	和 27263
冊數	10 (4)
函號	203 17

内閣文庫			
三	二	七	和
〇	一	二	書
三	〇	六	
二	一	三	類
架	冊	號	

四本



一降院奉より也此漢出日あること上三皇と号する
 漢は神古曰天子之文歸同皇不豫治國不言帝也
 帝は此門と訓する事ありといへども國を治るは帝
 位よりなり治るは天子の門と云ふこと也是は帝位
 に法をたつて治る事ありといへども皇位は此門の事と云
 ふてまつる也此皇位をよしの此門より治る事あり
 此皇位をよしの此門と号する事別の義也
 神代卷二の此の如しは也 十月寒月 日如死
 明名卷十月の此の海口也
 わるはこれいりある事ありは 雅 イイナナシ 知 イイナナシ

世代はわがごとくきこえり

皇愛うけし義と云ふ事実にあはれりては
 夫よりよき事なればのりなりナリ成る事
 初めは是れはしる事なりは也 讓國
 方よりあやう人の心はわが心なり 弟を敬
 源氏の皇國の内なるにありはぬはたふめりて
 皇位をよしに治る事あり
 内なる

天智天皇八年十月十二日丙辰大織冠赤原親房
 内なるは何時なるか上考述天皇元年陽
 始内なる

高野院開し又為前住の蒙り覽宣旨時持去殿而今
左の如く申す御政子は持中御言号左殿之弟不審然常
是にたておのいしれいふより云々
宰相中御言をりた

持統天皇御宇如皇中御言をりた御定去皇元年四月
御位慶雲二年四月以常田真之高御祖長麻呂信
宿祿麻呂更為中御言天皇八年四月以高野永年如為
持中御言は御政定長和元年二月如皇久御位房
如仁持中御言

よきつとくをよと 傳也 後 賢 日知記 賢 日知記

二重院のひむし 高野院のさうくあひありしと

昔東院七條后御子也新よすりて 西宮と云と
兼藤院のあふれハ時の人西宮つとあふとよひつたける
しうやうく御言とあつと云と

十六日あふん如くあひしふとあひしふと

彌生太辰之末原胤子ゆふ辰高友女母交也去飲注卷

女擬けり死

ゆふ辰

干時ゆふ辰
光原女

母明石入道女

わしりや わしりやあつと云と 信勝如記

六月廿一日ふハあふん 二十日

河相堂の門を垂長子准よりゆふは系融沈好代
のりあれも例ありし家ありる今古れ水接あり
事入つ事とちを也委賢木れ巻にのせり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

漂漂 並一 蓬生

けり中無蓬生も 詞熱常陸宮に蓬競^{エヒ}あえりし
岸とくくあり 奇よ志きと元色これ疾のうことを也
詠へ蓬生同し

蓬生 杜精同

蓬生根無根 漂滄波高風 三寔旅万里不後飯
本義容子念故宅三年門巷は内人相自相通乎

^{拾遺}
いそがく為る人蓬生此がなぬる宿のこ
とほつれつまの心 さらをひ

わらうはにとく人わらはるる海つらわらう

位をさうしにふるはれようひまの竹のそのよれうきあふ

かりれようひ娘の仕立あかりうめはら

し更に何おひつらん竹のたうきあふきよとひまの竹

おほきれあのをきをあひの水ようりしうきあふ

七文あよふは水をかき座上はあき甲あひのた

とらうきあふのた

棠之原女をたえよようつくるたのたあきあ

蓮をきれあきうとあきあふの配水配水

あつてれあうかゆみあきあきあきあきあ

ありうきあきあきあきあきあきあきあきあ

ひまの竹のそのよれうきあふ

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

いまの竹のそのよれうきあふ

魅 玉篇曰 木票 延長式 物精也

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

宗廟之器不齋於市礼記

あきあきのあきあきあきあきあきあきあ

あふ所なり 仁徳ありけり 予も 予も けふ少く 身をた
まはさむ

かみしりし 髪も 七夜を して

夢色に かりけり 子虎を

ふも ちと ちと ちと ちと

あはれ 下も ちと ちと ちと ちと

法衣 事なり

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ 法衣 還り ちと ちと ちと ちと

ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと 日記 ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

あはれ ちと ちと ちと ちと

君々為多くも去向くこれおのり向此神とあり候と
日向の神ハ道能神のより鬪旅の人おぬと此物我送
れは神の由むけのよめ之是建中此初院也昔孝帝
四十余の子此中に元末の子此中に元末の子旅の此の
とめて教む宮中之遊に鬪花の道にて死屯主付様
曰吾わ神行宮を由り是と云昔此名をたすと号す
も靈はやお小神とありり道能神是也は故に旅人
饑送の玉をも祀席ともいひ世流ハ之の神とも又
むきあ神とも号すなり花所祀席人醉水上帰
惟唐日行道神ハ唐顔玄福青楊漢讀抄云

多光おれ登養 海治曰李氏旅於名山旅客名也

神々々通致め候

わいこも 後 漢治抄 惇棟 日

お一此志しおあひやうくおれうらよ

君うけい此志し山を旅ともおれおくおとあひん

おれおらういはい老ふきうか何れおれおれいとうら

よ多さちりう旅しまはちおれうらにちうつらうら

かのとれまうらうらひひいとも ありしきあう

ひいしおらうらうらうらうらうらうらうらうら

ぬきしう家たあうらうらうらうらうらうらうら

あるはよき死をうけて日経よりちひまふるはよき死を
うけるは

人も多死を自らなすは死のうらみなくして
ある人をこゝろあふむ

ひつりのはよき死をうけるは死のうらみなくして
ひつりの夢に 帝より壹夜 命者

死の病をむすはちりしてはひつり入るもよき死

帝王略論曰梁孝元皇帝博極君千骨女并冠世名好
孝也篤信玄行多忌諱度宗在莫令敬之之江陵既陷王

僧

隋王僧辨等之弟也子是为敬帝右年二年禅位于

陳封江陰王或法云八代紀云梁武帝馬の鞭をのらさく

病を拂ひらふりしと云ふ事

春秋獻馬梳及馬鞭 日本紀十九

みよき死をうけては下流なるはよき死をうけては

えよき死をうけてはよき死をうけてはよき死をうけては

いよき死をうけては

いよき死をうけては

いよき死をうけては

いよき死をうけては 納法高辛擲也

是のほの物終の家省略の詞也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

並二開卷

用をよりけと之を述ぶる様もかやもや有詞のきく
かのほのきもいしなるきあり

元祿の事也いまはんとてとけりし

いさよふはさきよんあり 川 卒

はあまきとゆつさよすうあふをほくを録北山を吹こやうを

^抄 龍は絲のうひさう流系みる何忘るつりて割とあり

奥入はきき不けはりれる劫也

京にたうりてはて又北の秋うひらふはたのりある

は巻蓬をた改あるものこれ詞のきあり

いし山より人いふより 石山寺 聖公云々此字金龍寺人

日記云聖公云々此僧正朝寺有是生震且修好老

為求法向合衛國被法流依之切殘故月返面云

願望者是生流法無原也煩切殘法後修好僧既

早余既件修好僧為別内極之四并生將來國王是

被誠誓い念力生月如法是修好今生案查存

世受苦因也朝并養云建之太伽藍之打也世之寶

粮云是依教喻建之太寺奉鑄之佛依之石金告

夜之是之同夢中有人養之水边建之伽藍祈請所

金去東彼者夢覺令求勝地建之觀之像不經矣

月下野國初至石山寺今之石山寺是也

殿ハわらぬ山ニ多ク修好トシ

案田山とゆてもゆとおもともわらぬと云ふをりり

えらもさうありや

梓うけつをえられはむもさうありや

と記山よみながらあり

同山のこたれむらむらゆけとわらぬをりり

車ともかきおろし かけらうも放

あひをろく 頼廣

いふくたれをつまみいれりり

又七襖狩也 細信條板

きよの池開む久ハ夢におひきて後ハ

客を送道ノ買此開をかきりしす 異相例之

ゆくをいと開とあかき後とや後ぬ清水とハハ

仍と来し也

^{石標}開らてあはの森代あを清水よりし 石をさる

右邊比きうとけく 解也

わくハにわあふらをとたのうもわくハあや垣あは海

己今ハ遊遊ちりき海あはぬうも相あなり

開ちれきうとけくやまうめき海くうしをと

河海抄卷第八 正六位上物語博士源惟良撰

才十二繪合

一 亦文女清守弘徽殿女清有以繪合之典故号之

前亦文内より此子

元正天皇赤宇井上内親王 智武天皇 太子殿女 養老二年為

亦文后光仁天皇御為后

光仁天皇女酒人内親王貞安二年為亦文后桓武

天皇御之

桓武天皇女相承内親王延暦三年ハ亦文后平城

天皇御之

朱雀院中時微子女王

重明親王 天慶元年内成女

天曆初年女也院はいとちりく

ウツはこらみあはれこかうこのをことも

櫛箱 中箱 香奩 或ハ香粉

香奩宮の注付茶巻水原抄云花雪の巾着子此武調

友也佐香と致納うけ書力三寸方弘九寸長同

今此也ゆき物も久多かう又るさ海百歩ノ外ヲテホリスキ

ホソニテ 雜クサク

仰法云海はあさといは海もあさ也又といはむしう

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

今此也ゆき物も久多かう又るさ海百歩ノ外ヲテホリスキ

といは海もあさ也又といはむしう

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

葉又も有ゆりや種新也水原抄云今此

今此也ゆき物も久多かう又るさ海百歩ノ外ヲテホリスキ

今此也ゆき物も久多かう又るさ海百歩ノ外ヲテホリスキ

今此也ゆき物も久多かう又るさ海百歩ノ外ヲテホリスキ

かほいの山志とも此傳りよせんとうり行て

水原抄之是ハ新文に手やる繪也養字不審可

る葉之被奉内表絵也詞之わかうらたか下てんやう

ゆらんをちをよむやまきこゆらふとめし海やこい

の山絵とも此傳りよせんとも養字行てとわう養字

不審有らん

長恨奇之昭君と申す後ハありうくあはしあせし

しよつとあはし此のひなきくまはし

楊貴妃をる鬼ようとあはし昭君ハ夷狄ととく

ちよと怪ある魚ととく

かほひの山志とも此傳りよせんとうり行て

を海ありし日記也菅家宰府ら事と令記置行て

又海集と被附巾他也け例也

むのつるの巾かほひ 新文女巾

ふあききうううくともふ 有藏也ハ典傳以下非花族也ハ茶苞
の右藏也見右藏華篋也

海の物語のうしめれあやうあけとら此のよらほのうらきを

あはせくわうらふ

竹取翁 古物語也
多知也 うらほのお終 源氏他之有疑
其二帖

ひのつとあはしひらぬとふまきとら海也

神異經曰南方有大山長世里昼夜火風自不滅火

中有胤重百竹毛長三尺為布若不淨火燒之即
淨号火溪布也十例記曰大林有大歎如胤毛長三四
寸取之以為布名火溪布有垢汗唯以火燒布而良之
出振之白如雪李喬布詩曰曝泉非挂鶴院火有笑光
急ハそのあまそは幾れつゝゆきりきり

巨勢相覽

一説云巨勢金吾相覽日人也云々但女高名縁者相覽、
相覽氏之金吾相覽明末也相覽人兼和四年九月廿五日画山下

紀貫之送舟費之古以律書也見惟宗直本劫之

かんやうにかたきとさうして

紙屋入りてあつたふとさうして

かたきハ唐綺也かたきハ唐綺也

とていふけし或浪風なるも一ハ國よさるるわが

うい何れも治井一の巻にうかきかゝるわあゝとあり

ハもさうかにあつたわのハ新國ハハ梅檀木ハ

さびさうあつたわあつたわあつたわあつたわあつたわ

とあつたわあつたわあつたわあつたわあつたわあつたわ

あつたわあつたわあつたわあつたわあつたわあつたわ

急はひきりてはみら風をさそ

大馬門少志苑島中常則

天厩比書也

李以少邸道風

正四位下
泰保峯と縁た宰左貳高経男

いさめ治ふ正三位とあハせ

伊勢物語 業平朝臣有元 上三位古物院名之上心に本性
と本上と書也

兵衛の大君此公ありし 上三位物院名

てあり重明親王女也
後拾遺作志少小大君と

ふい中好

左京業平朝臣者四品所保親王才女男也少号左

ふ中好 取字に梅
公帝中好

母伊豆内親王也後四位下右近 采位中好兼表濃權

守元慶四年乙酉八月十八日辛酉卒年六十六見三代

実録國史神皇正統記 放帳不物略 孝学普化和

ふふりゆし加ま

中茶少くから海をさぬれと

古来物合勝負常例也

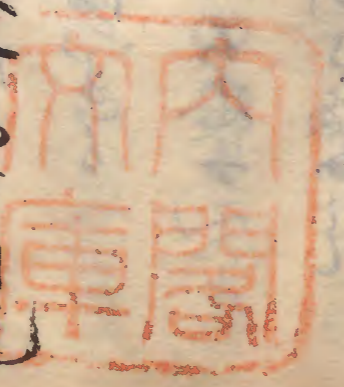
朱雀院寛平菊合永承六年内裡根合都芳門院

前裁寛子皇后文麻合 上东门院菊合正子内親

王综合ホ也好拾遺集正子内親王综合ホ也

加子茶子にゆきそりも

足利は浪のさくさくかけくきり卯花と



と信て札の四の足どかろて花足よりとあつらひ
まへよりあつらひ下濃也童れ装束たふ毒也右八ら也
棄の装束よかめしる也

物合風流中

天徳西文記云右方令持例演二札一高桑上自水滸
後西过献童女一人着青色實正枕浪花柳枝下居砌
次小令人昇負指例演置實正女侍記系次左方自
殿上侍乃桑上童女一人枕地敷く前持女石次童女四
人昇例演立地敷土小舎人二人於砌下衣傳置負指
前注水兼々磨下依心存例略之風流皆極也

かそ急ハりまうあつて山水のゆゑなる人々を
ふぬまのれハ

紙絵ハ留れあをみうて山水は氣氣ゆゑなる
あり 總絵ハ祈也

ひうれあつにまらく 石知

海舟のうらくり記よわをまこと日比よわぬ
水かりしきるやまの 知魚

天徳の山厨子取供の菓子干四次供の酒た右起座
献盃ぬえ

さうくといふあふよふまのきりあるまはまあひひぬ

其くぬる人のいねらとまをいしあひぬるいささあふん

論語曰有教回者好學不遷怒不貳過不幸短命

死矣今也則亡未同好學者

史記云顏回一草食一瓢飲不幸短命死仲尼弟子傳

白氏文集云文人教奇詩人薄命

ほんまのあめくはまのまをくを新しに

日文文はうにかさうはゆす礼樂ももも才女也

あ

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

遊仙窟云圍碁出於智惠チリテ

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

あくとる道とこいりてくとうあやくむ一の目い

源氏文章草食吹笛報琴彈琵琶事

信太右源氏 傳云大臣好讀虫魚本草類

又益工圖書丹書之妙也上天皇親自教習吹笛
報琴彈琵琶之伎思之取法究其微旨

あじ乃由りていとわいて

圖書フシノツカサ 察政紀累代樂器所之

物今由り遊事

百堪能之卿并殿上人等令能人置 天德地下百人相

交之由見而記兼曆永承共五百人永兼板合之付

之と今吹笛行見事記

わくとも八中交れ由かぬより給流見二六みり又吹るの行り

あまふ

天津大后其裝束一襲大袖之白合由衣一重糸

浅白草重由衣自他延緒

上东门沈菊合時之湯由衣中見由亮

かろりて奏ハ中交にあらむ行一と奏み行まは

或ハ中交ふあゝあゝと奏て奏行ふとわり理

不可然好吹磨石奏ハ中交にまゝの奏りまゝと

源氏由りてとられり

い由りてとる急人いひつゝあふ急きまゝをうへじし

天下の法皆自虞帝始史記亦一併始自聖代

昔由りてとる急人いひつゝあふ急きまゝをうへじし

世不徒か後群日如むと如むと人のふくむとぬむとあり

金光の経曰独拔而出成佛正光

史記曰大名之久不居後漢書曰位尊身危

每卒殆功成名遂为退者天之常也

文選曰木秀於林風必摧之行高於人受必非

杜詩曰自謂頗煥拔出立登要路津致君堯舜上

再使凡俗此意竟兼條行款非隱倫

大友皇子天智天皇十年正月任大臣廿五
天武天皇元年五月廿九被誅廿六

东三條左大臣兼和七年八月七日任大臣廿九
三月薨早立十代大臣左大臣左大臣例之六条院于北

ニクニツリて延之

才十三 松風

春名 乃とてひとくかふありはにきとくあり松風あり

さるやありてしむてんあぬけし海に流

寝の妻室の居る之源氏未其仁ありゆさるる有之

あぬけしとある也礼記曰聘則為妻奔則為妾

注曰聘問也妻之言齊也以礼見問則得與夫飲體

妾之言接也言得接見於君子不得與夫飲體也とい

一り聘之礼也奔無媒心也野合之義さるは

は系上も相妾と云ふは寝るに居るといふ

夫の君をこれありくもせし

加せとも老にがまぬけ去る花のかりくもあつらふ
むらさきみの中勢はともあつらふをゆし行きた
不天井川のわろにありりき山里わらわら

兼中書王 蕙の事之号小舎美

蕙他故切 蕙トキウ未賦云余龜山之下に聊十出居群官休

力欲終老於此速草堂之成爲執政者狂被陷矣君民
に諛を處于想ウツル

さる人まよのハあきわぬん 上後思や此のせまぬんとうら

わやまれやあしうして物事は志とあう

荻茅 菽下屋 執令也

かのこのゆきにかぬけくともあつらふ

かぬくまよハ人にならぬん之或は肩と屋とひま

ともあつらふ之世俗小肩といふこと言ふ

文選曰息肩於漢伏戴高祖とありけん也

んゆりたぬくまよのあつらふにわき物かはし

あつらふのまよに中行りて

民アを捕仔初事也蕙の親重二男後四位上云文學

士臣アを捕多くの事とまよ 畜産

ひきうらにほりあつらふまよをうらあつらふらあつらふ

強靱つるむけあき たらあつらふ換換一説をらとよ

きうれおよと信まほふよめは

瀧の音はあてひこく成ゆきと名うめまはくはあき

好撰集云 西きたあま 赤保信門

わきまきう今あふうり瀧つをれまをみ入るりま

あけ集云大まよとれあきとの石田池一うはまき

けあくうりあしとまそ見ふあうて赤保の海ふ

かといよとあんめつたをひくうまきい海ふまか

そといひ瀧はまはらのあつ海ふの昔あうま

小倉山代里苗麓也大まよと泉落枕あま長

東山院のよめ飯の厚く水に如きまよと信ま

は系三ア

新集はじも秋海あらしひくかか海ま瀧の音か

作とにま水詠海糸

あふのいあうまああうらまむとん 海糸

海糸のからぬあうらまむとん

あまのいあうらまむとん

あまのいあうらまむとん 海糸

あまのいあうらまむとん 海糸

あまのいあうらまむとん 海糸

あまのいあうらまむとん

わつそぬいのらかろうふあひく

有らるる海^命はとらうらるるまきあひく

祇君いともたうくまひりまむたうあく神うあふハ
とあひくさうつる 夜光玉

楚王は階侯地の病と為りしに七すの玉を合く

夜光玉と名を教しと階侯は玉を得く楚王に

献し夜中少常有光の玉に名夜光玉と奥入
に中玉とあり不審也

とらうらるる海はとらうらるるまきあひく

あふ道に初夜はとらうらるるまきあひく

あやもさうけともさうらうらるるまきあひく

孝經云は日夙興ツトヒヨキヨニイテトモハツカシムルコトノセリ夜寢ヨニイテトモハツカシムルコトノセリ己泰尔取甘誣日當夙興

夜寢進徳修業の毎泰辱其父母

とらうらるる海はとらうらるるまきあひく

かうらあはれけうひらとらうらるるまきあひく

あしきとかくしあひく

富貴不歸古邠女涕夜行 朱實昭 傳上仔行人 奥入日

榮くは心猶不叶可劫

天ふひまらるるあひく

天人階三途事也 勘文天上此樂只て海三余しんといふ

あまのいみぎ前なる之の如く之を三途といふ天上に

せにぬるありて石浦に隠居し居るとこれみらの一

時といふもあや天よりかつて三途に墮ちるといふ

と此祝の折るは頗不使く如何

あまの別にぬらうこころ折ある

世れ中にさうぬ別のあまの代もといふ人の子のあ

昔れ人もあまのといひきる浦の朝霧つらう初めに

あまのあまのいみぎに海に色りあまの引あま

いみぎにあまのいみぎのあまのあまのあまのあまの

中古先年いみぎと或ハ言る或ハ衣佛人教旅か

かとありいみぎのいみぎのいみぎのいみぎのいみぎ

かのあまに 彼岸也

いくかうゆたふ秋ととくはくうたふのて秋ととん

張寒漢武帝此使とて花よ言て天漢の源と究

くに孟津にいありと牛女にあひくうりといふと

つひと詠する之文選よ八十年とあり三十歳と

つくぬるを日本此に仁徳天皇の時後河國大井

河ふあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

いよとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

浦小舟進是と号の船ニシテ八查若と筏と
 用之船ヲ如日本記也作特殊尊蛭子とる
トモ一カも葦船或多盤椽梓舟下又あり白
 水線あり之舟あり又新武皇奉宗神
 意神武皇舟也造とみあり若と時時
 布此船の姿昔子孫始と造もあり
 かと之く独之まら山とにむに船る松風あり
明石此奉子入道の石と先皇此也不加ひて信山伏
のひうふ松風ときわく信ありひ一之
 かつ此地とり小舟

と元皇元年三月始建修興院と元皇と水原抄
云大祭と秋宇夏麻佐日和記又号葛野院と續
つき也秦河勝建立葉原仙且美葉上にさのの
水堂あり葉原仙代表と信とありき葉之院
瀬守と秦と示懸隔欣細と桂院外桂川と也天
曆八年八月廿日の記曰今元暲作た右信陰陽次
新樹下の桂院外と桂文院は終也
との元わらぬの新ん禮也信ととかし
との元ハ朽るはぬときとんらぬ中にかくともか
 晋王質の石室山にいりて一百畧とんる信小舟

柳の栢ありし事之を所とありともかゝん所のひし
か多しと云

述異記曰晋王質伐木至信安郡石室山見数童子
圍碁与質一物如枣核含之不飢局亦终斧柄爛
盡既返每復時人郡國志云石室山一名石橋山一名
穿石山晋中朝時有王質者嘗入山伐至石室有童
子数四彈而斧曰放斧聽之童子以一物状如枣
梅含之不復飢遂復小停復認俄頃童子語云汝
来已久何速不玄質應色而起栢已爛益

氏字云云人の山くらハ志はうりもまじく

^{六帖}今よりとありしははる君をまはむ山くらハ志はうりもまじく
^日秋を是れは山くらハ志はうりもまじく

始於此

是ハ浮瑠北道宮山口余のくとのふハかりと

しと云ふ事ハ山くらハ志はうりもまじく

きふの事ハ山くらハ志はうりもまじく

しと云ふ事ハ山くらハ志はうりもまじく

しと云ふ事ハ山くらハ志はうりもまじく

しと云ふ事ハ山くらハ志はうりもまじく

あつたまはしつとて思ひてくせしるるや

いとあまをれなうらみはたうぬ

軽^リ如^地 袷 男共着之 貴人より

あつたまふとれ 附如具

あつたまふとれ

奥入

あまの海は甚波不神ゆきとてあまをいひてふとてあまのいふも
あまの海は甚波不神ゆきとてあまをいひてふとてあまのいふも

あつたまふとれ

あつたまふとれ ちきうをたてしひめ子ね 姫松の神より世に若くまを

あつたまふとれ

あつたまふとれ イライ 小井也 ちたふとてあまのいふも

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ 存也 ちたふとてあまのいふも

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ

あつたまふとれ

とて遠くはるかかたのくにまはるるに
けから相す

なまきありしころもかくもはかしく
かきあつてきり

何く山に上りて流るる水も
かきあつてきり

流るる水もはかしく

白雪は公のまはるるに
伴行人

伴行人

高光少将のまはるるに

都よりまはるる奥山のよりの水も

水も

九重に上りて流るる水も

松色に

惟よもまはるるに

わらわぬ人も

今もまはるるに

おのれは

霜のゆくは

小なるも

つてとておぼくわいひき家とるを杉蓑也より芳
海ふさこれ何の模の花といふはなをて親のにお
らわさくあう強倉ふつと晦くさうといふ葉を
夏人回音於理不音にやあてさあ枝をいといふを
有るうさうさうと和語ふはとれつうとてけさうの有
といふともすふさ身歎草ふは名とるを用と此
とつてうも実を記る有つてさうまにねさあ枝を
化さる唐人のすあゆり杉枝をと十日菊も化さ
て其例不て勝斗の西条先と親と八眼希子枝わ
葉ハ喜々葉葉葉をといふ況量に枝をさる也い葉

の枝蓑の枝とよめ例をわつといふ其謂有る
葉のあはえはうりまてあふあうい枝にさる
あうけさう杉蓑鏡あり

きふ六日此のわいあく日く 物文云六日此の

長祚の忘之長祚方遠六日六日此境はる之九條右
兼相記天慶七年二月七日庚辰及右辰後十二月廿八日
至干明日合八日用門物忘は已時象敏

葉之若六日物忘は猶可也

かつこれをも 葉天倫日植花八月也月中仙人植樹アリ
其初おナルトキ仙人是見之漸成形存植樹生元兼各

苑ら月中有河之水上有極樹高入百丈

由川かひの弁はわくろくすいかに此處よりさかむを新うらけの物終
ろく此巻之間にやういふことありぬるものと見作
と右のやうに新ありてぬるくはりぬる年と此終
却てかつ川のもあつふきあわのまよとらちりし此
新と右邊をぬるうらにあましあつたはぬとせうに此
かあよとらせよとわぬを新あつうらうま久ぬいふ車
あつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり
てうらぬはうて新あつるほかにあぬとらうかぬいと
かひいしていらまはあつらひらたうらまはかきゆは後

かかふあひあむとらうらまは新
あつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり
てうらぬはうて新あつるほかにあぬとらうかぬいと
かひいしていらまはあつらひらたうらまはかきゆは後

久曾の申いしうらまはあまは光とれうあはむとあか
かのわいらはあまはあつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり
わつらあまはあつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり
右大弁とらうらまはあつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり
あまはあつてゆいゆいさきまを中ぬるのまはたはたはちり

い弁若光源氏元服の時為臚第少く言繁人まあひ

朱雀院の延喜十一年上元宮の才女は
しきともけあや由中々温子照宣公女御に
よみて即位ありあつて西宮に居るに
亦一皇子ありて其ありしかども
長とあり給ふは是れ例といふ也
元大納言今一妻はありとて
行はせらるゝなり
大納言の條院中居に居るなり
ありて大納言の條院中居に居るなり
大納言を贈り給ふなり

かゝるにふらふきめくはるふのまのわん

光 榮 喜見 日記

かゝらうみいふなりはるふのまのわん

ふらふのまのわん

はるふのまのわん

あつてはるふのまのわん

あつてはるふのまのわん

尼見

あつてはるふのまのわん

あつてはるふのまのわん

平織 リヤ記 平織 リヤ記 一尺織成襪 後世諸記 曰多須岐

延喜抄の式に 表裾襪 襪

一尺云玉手織トテ袍ノ山玉と加テテ此等ノ女ハ

帯ト云是と蛇ノ比礼地ノ比礼只此の比礼ト云

ゆふあをれト云事佛と襪に云を云古俗拾遺

人丸 ヒカチ 蘿苜為平襪 ハカチ 昔の調合

玉あをれけぬ時云これふと時句あぬ事は云

あをれけぬハ七日の云云云云云云云云

あをれけぬハ云云云云云云云云云云

あをれけぬハ云云云云云云云云云云

た久良比止曾乃不祢止女之川未多平止万知川

久礼取見天の廿户利已平也曾与也廿春の二十利已

平曾於已止於已曾廿春止毛以彼女手手可太仁

川万た取也那彼廿春毛左祢已之也曾於与た廿春毛

左祢已之也曾与也催る未呂採人

舟とじりかぬ人の云ハ云云云云云云云云 ヲチカメ 日比

云云云云云云云云云云云云云云

云云云云云云云云云云云云云云云云云云云 セト 兄

兄 セト 岸男 万葉

初て云云云云云云云云云云云云云云云云云云

不弟を楨子無毒に病者恒食之

院の山ゆいえ多きをうらたけうらたけく高たけ行

寛平二年勅たむ長原融嗣白事斬之依病有祝

事必及寛平遺戒之若く長已薨言布無殃

より一火をこれ清中うらたけくをて行ぬまを

如煙盡燈滅 法苑珠

論衝曰人之死也猶火之滅也而耀不照人死而智

不慧

加りきふらむて 豪家より千人婦謂豪 又言家

史記江揚冠子曰德万人者謂之俊德千人者謂之

豪徳百人者謂英之

敵上人をいふてひらいてはうらたけくをてのうらたけく

此のまあり

村上の記云天曆八年正月四日母后崩北宮を御

弱なる簾及總蓋に袷色細布に端男額

大しはくうらたけくをてのうらたけく

深桑此野の標もふらたけくをてのうらたけく

ほらむの僧都 法務僧都 折右大臣の代被定置僧經

とむむじれねらうらたけく 天服

あまのうらたけくはゆらん 何益

佛のいふ海より行しむんのありきみらとある

真言秘密事也

あまのふと(ゆり)もあまのふと(ゆり)ん 塩梅

う此日中誓いのみこしを行(ぬ)りしうすかふ

桃園式部(の)ま(の)に中誓(の)し(る)てあり

内記(の)延喜元年十月十六日(の)長(の)奉(の)式(の)に親王

薨逝

えん(の)ん(の)り(の)に(の)し(の)う(の) 天(の)変

ひ(の)り(の)世(の)小(の)さ(の)海(の)る(の)み(の)こ(の)し(の)を(の)事(の)と(の)り(の)う(の)あ(の)じ

ゆ(の)き(の)ゆ(の)り(の)國(の)ふ(の)も(の)さ(の)る(の)ん(の)ゆ(の)り

存漢(の)史(の)記(の)上

堯湯負洪水大旱之貴(の)宗成王有雉(の)迂(の)風(の)之

爰(の)雉(の)有(の)小(の)異(の)不(の)失(の)大(の)德(の)

及成王用事人或譖用公(の)牛(の)特(の)楚(の) 史(の)記(の)

見(の)記(の)政(の)書(の)曰(の)昔(の)堯(の)帝(の)与(の)室(の)を(の)七(の)十(の)余(の)戦(の)甚(の)矣(の)既(の)勝(の)

之(の)後(の)使(の)致(の)を(の)年(の)九(の)黎(の)礼(の)德(の)頒(の)預(の)征(の)之(の)射(の)之(の)毋(の)不(の)失(の)其(の)

治(の)禁(の)為(の)暴(の)虐(の)而(の)陽(の)放(の)之(の)在(の)陽(の)之(の)伐(の)即(の)致(の)を(の)年(の)討(の)

尚(の)也(の)追(の)武(の)王(の)伐(の)成(の)王(の)之(の)伐(の)亦(の)致(の)を(の)年(の)

本(の)朝(の)延(の)喜(の)代(の)世(の)官(の)家(の)九(の)邊(の)事(の)也(の)初(の)漢(の)先(の)張(の)不(の)て

御(の)斗(の)

と(の)り(の)う(の)あ(の)は(の)わ(の)り(の)ま(の)じ(の)て(の)も(の)ま(の)の(の)ひ(の)も(の)ん(の)り(の)か(の)り(の)ま(の)じ(の)て(の)あ(の)り(の)

秦始^{サウ}皇^ノ莊^{サウ}襄^ノ王^ノ子^ノと^シて^シ位^ノを^シ即^シと^シて^シも^も実^ノ始^ノ皇^ノ
の母^ノ太后^ノ嫪^ノ毘^ノ不^ノ辱^ノと^シて^シも^も下^ノに^シ密^ノ通^ノと^シて^シも^も

見史記傳

一世は源氏純言大后よりなりて然らば又所ふみこし成位也
はさるるおまの例ありき

一世源氏仁官は即位例

光仁天皇 元細く 桓武天皇 元極位上より中整也

光孝天皇 元一京より 宇多天皇 貞觀十二年賜源氏仁官位
仁和三年為親王即位

式内是忠親王 寛平二年十二月九日立親王元中親王從三位
右宰相是貞親王 源氏純言大后從位親王

中整の意的親王 貞元二年四月廿九日親王
元極位正三位源氏

上野大守感親王 康保四年七月廿九日親王元源氏大后に即位下

由らわうひてこし車ゆりさきさきゆりし行

馳牛車也 此位よりひてとハ一凱子也

寛弘八年八月九日大后在東門中車為貫門上東門

兼平二年九月九日大后在東門者大后源融寛

平元年十月十九日勅大后在東門者大后源融明天延二

年二月廿八日馳輦車

五命ゆりしとよのけりしと心雨にうりしと日行

た傳を音を子園を質於秦の逃帰認齋子日与子

山吏と吏ハ大御さふわつらん深心と由吏と共ふも
のらよハとこしつらふ

とらうふハ是れ花のあはれにものあつらん
葉ハ秋のわらわしとらうあつらん

晋石季倫居金吾春花海州化宇里錦障逢
皇不遊樂思是之令人樂天

万葉中一云天皇詔曰大臣者余知長競憐春山
花之艶秋山千葉々々新時額曰王ハ秋判り
あゆこあつとらうあつらんしもあつらん
うりし花もさけしとらうあつらん

きさうてもんはと花のあつらん
とらうあつらん
うみし秋山とらうあつらん

うまも内にははとらん見新あふめうはりて

自古逢秋悲寂寥我言秋日勝春朝 秋詞劉禹錫

あはれ秋よんごうあつらん
あはれ秋よんごうあつらん

あはれ秋よんごうあつらん
あはれ秋よんごうあつらん

秋の夜のあつらん
あはれ秋よんごうあつらん



56

枚

